

兵庫県の地場産業の紹介



兵庫県の産業は阪神、播磨の二大工業地帯における鉄鋼・造船・機械あるいは化学工業を根幹として発展してきました。しかし一方では、郷土の歴史と伝統に培われ、地域社会と密着した地場産業の産地が県内各地で形成されています。

県内には、5業種（大分類）、約40業種の地場産業が集積しています。特に、清酒、皮革、手延素麺、かばん、線香、釣針などは全国トップシェアを誇り、この他にも、ケミカルシューズや播州織、

三木金物（利器工匠具）、淡路瓦などが全国的に著名な産地として知られており、地域における重要な役割を果たしています。

【化学・雑貨】

皮革（一次製品）

概要

- （1）弥生時代後期に大陸からの帰化人が鞣製技術を伝え、その基礎を築く。
- （2）全国1位の出荷額を誇る。
- （3）例年11月に「ひょうご皮革総合フェア」を「たつの市皮革まつり」と合同開催。

起源・沿革

兵庫県における製革業の歴史は極めて古く、弥生時代後期に大陸からの帰化人が鞣製技術を伝え、その基礎を築いたとみられている。その後、江戸時代中期に全国的な商品経済の発達と姫路藩の重商政策のもとに大きく発展した。

当時、既に地域的な分業が行われており、鞣製部門は市川流域をはじめ西の揖保川流域及び東の猪名川流域に沿った地域に発達し、加工部門は姫路城下町の中二階町から東二階町にかけて展開していた。また、原皮は大坂商人を通じて調達され、大地主のもとで村民による賃加工が行われていた。

明治期になって近代的鞣製法が取り入れられ、大正期に軍需専門化が行われて急速に企業化が進んだ。戦後は強制的な軍需専門化は分裂し、小規模民需産業として再出発した。業界は昭和26～38年の間に著しい成長を遂げ、昭和40年代の後半に入り、経営の合理化や設備の近代化を進展させた。

現在は、姫路市の高木・御着・網干、たつの市の松原・誉田・沢田及び太子町などが主な産地になっている。企業数、出荷額では全国の約2分の1を占め、特に成牛革の生産量は約7割のシェアを誇っている。

現在の取組

- ① 国内最大級のマテリアル展示会である東京レザーフェアへの出展
- ② 兵庫県内の地場産業である神戸のケミカルシューズや豊岡かばんとの産地間連携
- ③ 例年11月に「ひょうご皮革総合フェア」を「たつの市皮革まつり」と合同開催

問い合わせ先

兵庫県皮革産業協同組合連合会

住所：〒670-0964 姫路市豊沢町 129 番地あさひビル 4 階

電話：079-285-3872

FAX：079-285-3268

URL：<http://www.hyohiren.or.jp> (外部サイトへリンク)

にかわ・ゼラチン

概要

(1) 兵庫県での生産量は大きく、ゼラチンは国内の約 25%、コラーゲンペプチドは 50%、にかわは 100%を生産。

(2) 平成 23 年末に和にかわの復活により、文化財の修復、日本画、漆工芸、製墨など伝統産業に大きく貢献。

起源・沿革

にかわ製造業は皮革産地である姫路・龍野地域において、原材料の床皮や皮革屑等の入手が容易であったことから明治の初めに姫路市周辺に興った。姫路周辺でも網干地区は 20 世紀初めに大規模産地として有名になった。さらに産地は、明治 40 年代から大正期にかけて余部、飾磨、御着などに広がり、昭和に入ると龍野、三坂も加わった。当初は農家の副業的なものであったが、大正になって企業化され産地としての体制が整った。業界では、従来の網干膠皮革産業連合組合から協同組合へと組織を一新し、平成 7 年 12 月に「西姫路にかわ皮革産業協同組合」として発足した。

昭和 32 年の最盛期には企業数が 78 社に増えたが、マッチ業界の衰退により業者数が減り集約化されたものの、現在でも日本国内のにかわの 100%は姫路地区で生産されている。にかわの主な用途は、紙器(紙箱、製本、事務用品)、紙管(紙・布や繊維などの巻き芯や郵送用の円筒等)、サンドペーパー等の研磨紙、金属精錬、マッチなどである。

平成 23 年末の和にかわの復活によって、文化財の修復、日本画、漆工芸、製墨など伝統産業に大きく貢献している。

また、ゼラチンについても姫路地区での生産量は国内の約 25%を占めている。ゼラチンは、牛、豚、魚、鶏などのコラーゲンを加水分解して精製をした物である。用途としては、食品用では各種ゼリー、グミキャンディー、ムース、ヨーグルト、レンジアップ食品など、医薬用途としてはカプセル、湿布剤、糖衣錠など、化粧用途としてはシャンプー、クリーム、ローションなど、工業用途としては各種フィルム、印画紙、接着剤、金属精錬等である。

さらに、姫路地区ではコラーゲンペプチドも国内の 50%を占めている。コラーゲンペプチドはゼラチンを酵素で分解して消化吸収力を高めた製品である。水に溶け、冷えても固まらない。臭い、味も殆ど無くコーヒーに入れたり、料理に加えたりどんな形でも使えるので一気に利用が広がった。原料は牛、豚、魚、鶏などで、近年魚由来製品が伸びており、美肌、保湿を目的とした美容用途、関節痛緩和など健康食品用途に幅広く使用されている。

問い合わせ先

西姫路にかわ皮革産業協同組合

住所：〒671-1225 姫路市網干区福井 45

電話：079-274-0111

FAX：079-274-1735

事業活動：

- ① 展示会等での販売促進事業
- ② にかわ、ゼラチン、なめし革等に関する研究開発事業
- ③ 経営及び技術の改善高度化、または、組合事業に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供
- ④ 福利厚生に関する事業

ゴム製品

概要

(1) 明治 18 年に兵庫県内にわが国最初のゴム工場が設立され、さらに明治 42 年には英国資本によりダンロップ護謨(極東)株式会社が設立されたことで、神戸を中心とした大規模なゴム工業勃興の契機となり、大正 7 年には朝日堂護謨製造所によりゴム履物が開発された

起源・沿革

「神戸開港 30 年史」によると、明治 18 年、神戸に日本護謨製造所が設立され、ゴム球及びゴム枕の製造を行ったことが記されている。これがわが国における最初のゴム工場である。

その後、明治 27 年にラバー商会が設立されゴム引の水枕を製造した。さらに明治 42 年には英国資本によりダンロップ護謨(極東)株式会社が設立され、人力車タイヤや自転車タイヤの製造が始まり神戸を中心とした大規模なゴム工業勃興の契機となった。

自転車タイヤ製造工場の設立が続いた後、大正 2 年阪東調帯合資会社によりゴムベルトの生産が始まり、大正 7 年には朝日堂護謨製造所によりゴム履物が開発される等、神戸のゴム業界は大きく発展した。大正 10 年末には西神戸一帯に大小 100 軒余りの工場を数えるに至った。

このように兵庫県は全国一のゴム産地を形成した。しかし、業界は二次世界大戦で設備の大半を焼失し、その後も朝鮮戦争による原料ゴム相場の暴落、昭和 30 年代の生産過剰、昭和 46 年のドルショック、同 48 年のオイルショックなど幾多の試練に見舞われたものの、その都度これらの困難を克服してきた。

その後、昭和 63 年より続いた内需主導型景気もバブル崩壊とともに平成 3 年下半期より不況に転じ、企業は減収減益に陥った。さらに平成 7 年の阪神・淡路大震災により多くの企業が被災し、大きな損害を被った。

そして長引く不況の中で一時的な回復の兆しが見られたものの、情報技術(IT)関連の不振で世界経済は同時減速の色合いを強め、特に日本経済は内需不振と貿易量の縮小という世界経済の悪循環の最前線に立たされることとなり、ゴム業界においても今なお不振が続いている。

問い合わせ先

兵庫ゴム工業会・兵庫県ゴム工業協同組合

住所：〒650-0023 神戸市中央区栄町通 4-1-10

電話：078-382-3520

FAX：078-382-3520

神戸ゴム工業協同組合

住所：〒650-0032 神戸市長田区苅藻通 1-1-24

電話：078-671-6391

FAX：078-671-6354

ケミカルシューズ

概要

(1) ケミカルシューズの発祥は兵庫県神戸市、物資不足の時代に新たな素材として靴業界に一つのポジションを確保。

(2) 平成 29 年度には「神戸シューズ」の初の直営店を東京・銀座の商業施設に開設。確かな技術、歴史に裏付けられたノウハウ等を駆使し、豊かな素材、洗練されたデザイン性に日本人の足に合わせた機能性を持つ付加価値の高い靴を目指し、『神戸シューズ』でかつてのケミカルシューズのように、靴市場に一つのポジションの確立を目指す。

起源・沿革

ケミカルシューズが誕生したのは、昭和 27 年頃といわれている。戦後の物資不足に喘ぐ日本で、ビニールシートを利用した靴が神戸の長田で考案され、これがケミカルシューズの始まりとされている。当初はファッションシューズやビニールシューズ、モード靴というように、その呼び名も様々であった。これがビニール素材、いわゆる化学素材を利用した靴ということで、ケミカルシューズと呼ばれるようになる。その後、材質の改良や接着剤の開発、加工技術の研究等が蓄積され、昭和 30 年頃までには製品としての基礎が確立された。

神戸市の長田区、須磨区にケミカルシューズ製造業者が集中しているのは、元々、この地域がゴム製はき物の集積地であったこと、また、業界の性格が手工業的であり、大手メーカーが参入し辛い環境であったこと等が考えられる。

ケミカルシューズは絶えず新しい素材の開発、改良、そしてファッション商品としてのデザイン開発能力を育み、ファッション性に富んだ靴として、靴市場に一つのポジションを確立する。また、海外にも積極的に輸出を行い、ピークとなった昭和 46 年には生産足数で 4000 万足、金額にして 246 億円までに達し、外貨を稼ぐ有力な産業としての一面も持っていた。

その誕生から一貫して興隆を誇ってきたケミカルシューズ産業であったが、その後のニクソンショック、更に追打ちをかけるように石油ショックが起り、輸出メーカーは壊滅的状况へ追い込まれ、ケミカルシューズ業界も高成長の時代から低成長時代に合わせた変化を迫られた。これ以降、ケミカルシューズメーカーはほぼ国内市場に回帰し、業界全体も内需産業へと転換が図られた。こうした中、昭和 40 年代後半からのカジュアル化ブームや昭和 50 年代のブーツブームなどもあり徐々に回復し、日本がバブル経済の真っ只中であつた平成 2 年に生産金額のピークをむかえる。

しかし、これを最後にバブル経済の崩壊、さらには平成 7 年に発生した阪神・淡路大震災により神戸のシューズメーカーは壊滅的な被害に遭い、その殆どが操業不能に陥った。これを機に、靴の生産地が神戸から海外へと徐々にシフトしていくことになる。

そして、生産地が中国をはじめ、東南アジアの特恵国などの海外へと大きくシフトしていく中で、数

度にわたる円高や原油高、あるいはリーマンショックや東日本大震災等の外部的要因にも見舞われ、毎年のように右肩下がりとなる厳しい状況が現在も続いている。

ケミカルシューズが誕生して今年で 65 年が経ち、この長い年月の間に使用する素材や製法、デザイン性等、生産する靴も大きく変わり、また、流通形態や消費者嗜好等の変化もあり、既にケミカルシューズという概念も無くなりつつある。

ケミカルシューズは物資不足の時代に、新たな素材として靴業界に一つのポジションを確保したが、そのケミカルシューズを誕生させ、育ててきた産地が神戸長田である。そして、この産地に焦点を当てたのが「神戸シューズ」である。長い間、国内最大規模を誇る靴の産地として取り組んできた確かな技術、歴史に裏付けられたノウハウ等を駆使し、豊かな素材、洗練されたデザイン性に日本人の足に合わせた機能性を持つ付加価値の高い靴を目指し、かつてのケミカルシューズのように靴市場に一つのポジションを確立したいと考えている。

現在の取組

- ① 一般消費者を対象に「くつつ子まつり」を年に 2 回（6 月・12 月頃）開催し、靴メーカーが一堂に出展しケミカルシューズ業界の PR を実施
- ② 靴・アパレル関連卸・小売業者向けの日本最大級の靴展示会「グランドシューズコレクション」を年 3 回（5 月、10 月、1 月頃）実施
- ③ 将来の靴業界を担う人材を育成するため「靴プランナー育成講座」を開催
- ④ 平成 29 年度には「神戸シューズ」の初の直営店を東京・銀座の商業施設に開設

問い合わせ先

日本ケミカルシューズ工業組合

住所：〒653-0037 神戸市長田区大橋町 3-1-13

電話：078-641-2525

FAX：078-641-2529

URL：<http://csia.or.jp>（外部サイトへリンク）

活動事業：

- ① 若手人材の発掘、育成等(ファッションシューズコンテスト・靴プランナー養成)
- ② 見本市の充実
- ③ 流通問題の検討・改善
- ④ 神戸シューズブランド化事業の推進と研究
- ⑤ 貿易自由化・グローバル化に対する海外情報収集等
- ⑥ くつつ子まつりの開催等
- ⑦ その他、業界の安定化に関する調査等

マッチ

概要

(1) 県内のマッチの全国シェアは 90%を誇る。

(2) 県内で生産される高品質な広告用マッチは、現在も生産量の約 20%弱は欧米向け中心に神戸港から輸出されている。

(3) 一般社団法人日本燐寸工業会ではマッチに関する各種資料を保管し、マッチに関する研究者の便宜を図っており、明治時代からのマッチ商標の集積は約 4 万点ある。輸出用マッチの商標が多く、各国の民族性や趣味等が商標を通じて窺い知ることができる。

起源・沿革

わが国のマッチの生産は明治 8 年東京で始まり、急速に国内市場を満たすと輸出中心の産業となり、貿易に有利な大阪・神戸近辺に業者が集積した。さらに、労働力や製造上の気候条件などもあり、兵庫県が全国のほとんどを生産するようになった。

その後、輸出不振、外国企業の進出、過当競争等数々の変化を昭和 27 年の調整組合の設立によって克服した業界は、設備の近代化を中心に業界の体質改善に成功した。

生産地は神戸から次第に西へ移り、現在は姫路市・太子町および神戸市で生産されている。

使い捨てライター等の普及により、マッチの消費は大幅な減少傾向にある。業界は需要の落ち込みに対応するため、培った経営資源を利用した土地の有効活用(駐車場・テニススクールなど)、ラベル印刷技術を活かした印刷業界への進出、広告マッチ販路を活かした販促商品の開拓(紙おしぼり・ティッシュペーパーなど)、その他の分野へ経営の転換・多角化を促進している。

現在、業界でマッチ製造の中心となる自動マッチ製造機を設置している企業は、姫路 2 社・岡山 1 社の 3 社に集約されたが、機械の耐用年数も過ぎて老朽化しており、維持管理に問題を抱えている。各企業は得意な生産分野に特化し、互いに製造委託等の協力体制を築いている。

現在の取組

マッチに関しては業界活性化委員会を組織して、需要開拓の方策を継続して検討する中で、防災用缶詰マッチという新たなジャンルを開拓した。平成 23 年 3 月の東日本大震災以降、防災用品として注目されている。

平成 21 年には団体で運営するショップ「マッチ棒」を「北野工房のまち」にオープンさせ、現在は日本で唯一のマッチ専門店となっている。マッチ及び関連商品の展示・販売、マッチの歴史・製造工程等のパネル展示を行い、マッチの普及・啓発、マスコミからの取材対応、アンテナショップとして消費者の声を反映した新商品の開発・発信拠点としての役割を果たしており、また体験型観光施設として社会に貢献している。

世界的に安心・安全・地球環境への優しさが求められる中で、雑木・古紙・無害な薬品を使用して作られる「環境に優しいマッチ」はエコ商品として見直され、近年マスコミ等からの注目度も高まって来ている。また日本の作法として神仏燈火用にはマッチを使用してもらうなどその PR に努めている。

問い合わせ先

一般社団法人日本燐寸工業会・協同組合日本マッチラテラル

住所：〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 5-5-12

電話：078-341-4841

FAX：078-341-4371

URL：<http://www.match.or.jp> (外部サイトへリンク)

事業活動：

- ① 情報交換・研修会の開催による会員・組合員の経営多角化の支援
- ② マッチの振興・PR
- ③ 情報収集と伝達
- ④ また広く一般にむけたウェブサイト「マッチの世界」、マッチ専門店での展示・販売、外部イベント

線香

概要

(1) 兵庫県線香協同組合は、平成 17 年度から地場産業である線香をブランド名「あわじ島の香司」として位置づけ、国内外で「香り」文化の浸透と相まって、販路開拓・拡大のための事業を実施。

(2) 日本の「香り」文化や線香の歴史を語り得る、線香のマイスター「あわじ島の香司」は、原材料など 10 項目の厳しい認定基準を設けており、他産地では決して真似のできない品質管理に取り組んでいる。国内はもとより、フランス、ドイツ、オランダ、アメリカ、東アジアなどでは「あわじ島の香司」は高い評価を得ている。

起源・沿革

淡路市江井に線香製造が根を下ろしたのは今から 167 年前の嘉永 3 年(1850 年)で、良港を有し原材料の搬入と製品輸送に便利であったことや気候が線香づくりに適していたことが大きく影響し発達した。

泉州堺の熟練職人から伝えられた原料や技法に 167 年間の伝統と技が加わり、現在では線香の国内最大の産地として知られる。

日本最大の産地として、国内市場だけではなく海外市場の開拓に取り組み「あわじ島の香司」ブランドの確立を図っている。また、共同での商品開発や海外での PR を展開することで、より効率的な事業推進を行っている。

現在の取組

フランスを中心とした欧州で、ブランド名「あわじ島の香司」を通して、日本の「香り」文化や安全で安心な技術力に裏付けされた品質の良い「線香」をアピールし、世界に通じるブランド力の向上を図っている。

2017 年のパリ、アムステルダムでの展示会を踏まえ、バイヤーなどから多数の問い合わせがあった「オーガニック線香」を試作し、2018 年の展示会に出品したほか、“多様の香り”を少量で希望する欧州の顧客ニーズに答え、多品目・少量のパッケージを製作し、新しい顧客、販売チャンネルの構築に取り組んでいる。

香水文化が発達し、「香り」に対する熟知度が高いフランスで欧米人を対象に日本の香り「お香」の歴史や活用法を紹介し、「お香」の魅力をリアルに感じてもらう。

パリ市内の日本商品を取り扱う店舗を訪れ、「お香」の活用方法などを提案し、商談につなげる。

問い合わせ先

兵庫県線香協同組合

〒656-1511 淡路市郡家 621

電話：0799-85-1212

FAX：0799-85-0603

URL：<http://awaji-kohshi.com/>（外部サイトへリンク）

家具・木工芸品（神戸家具）

概要

（１）国内洋家具の発祥地。

（２）神戸の洋家具は歴史と伝統に支えられて全国に浸透し、高級和洋家具分野で独自のデザインを案出するなどにより高い評価を受けている。

起源・沿革

神戸はわが国の洋家具の発祥地である。明治の初め、四国の塩飽諸島から出稼ぎに来た船大工の真木徳助が現在の中央区加納町あたりに製作所を設け、神戸に持ち込まれた外国製家具や船舶装備品などを見よう見まねで製作を始めたのがその最初と伝えられている。

以降、時代を追うに従って専門化が進み、明治末期には５つの洋家具工場と椅子・テーブル類の工場数社を数えるまでになったほか、神戸市西洋家具商組合と神戸家具師組合が結成されるなど組織化も進展した。

大正期には家具全体の３割が洋家具になるまでウェイトは高まったが、大正１０年からの不況で企業の離合集散が進んだ。しかし、この時期に外国人を通じて採り入れた新しいデザインや技術がその後の神戸家具の発展の礎となったことは見逃せない。

昭和期に入ると、それまで外国人からの注文が大半だった神戸の洋家具にも徐々に一般家庭からの注文も入りはじめて洋家具市場の拡大につながった。

戦中は資材不足から生産中断を余儀なくされる企業もあったが、戦後はいち早く生産を再開し、昭和２３～２４年頃には製造がほぼ軌道に乗るまで回復した。以降は一般市民向け用途の増加とともに、船舶のインテリアや国鉄・私鉄向けインテリアなども大きな比率を占めるようになったが、船舶関係が大型客船の減少によりレジャー用クルーザーに主体が移り減少するなど、現在では一般市民向け用途が中心となっている。

既に、神戸の洋家具は歴史と伝統に支えられて全国に浸透し、高級和洋家具分野で独自のデザインを案出するなどにより高い評価を受けている。

平成７年の阪神・淡路大震災では、神戸の中心地に居を構える販売店の開店が平成９年にずれ込むなど復興が遅れた企業もあったが、生産工場は被災の程度が軽かったこともあり震災後比較的早期に立ち上がった。しかし、近年は職人の高齢化、主要な小売業者の廃業等により組合員数は激減している。

直近の取組としては、三宮センター街での展示など、神戸家具のPRに努めている。

問い合わせ先

兵庫県家具組合連合会

住所：〒650-0047 神戸市中央区港島南町 7 丁目 2-3（株）三上工作所内

電話：078-242-4808

FAX:0780-251-1927

事業内容：

- ① 生産販売の調査・研究
- ② 技能検定並びに技術向上
- ③ 従業員の福利厚生

④ 各種団体の連絡連携

⑤ 不況対策

団地協同組合神戸木工センター

住所：〒655-0003 神戸市垂水区小東山本町 1-4-11

電話：078-784-5005

FAX：078-784-5007

URL：<http://kobe-youkagu.com/> (外部サイトへリンク)

事業活動：

① 団地運営

② 共同事業

③ 福利厚生

④ 教育・情報提供

⑤ 労働保険事務組合

⑥ 兵庫県下・近畿ブロック全国工場団地等諸団体との連絡・連携

生田家具組合

住所：神戸市中央区中山手通 1 丁目 22-23 (株) クレアシオンフジイ

電話：078-241-3011

FAX:078-241-7299

事業内容：

① 親睦を中心とした事業活動

神戸葺合家具組合

住所：〒650-0047 神戸市中央区港島南町 7 丁目 2-3 (株) 三上工作所内

電話：078-242-4808

FAX:0780-251-192

事業内容：

① 親睦を中心とした事業活動

そろばん

概要

(1) 伝統的工芸品に指定された「播州そろばん」が生き残りをかけ、その技術と素材を生かした新たな商品開発を行い日本から世界に新たなマーケットの開拓をしている。

(2) 播州カラーそろばんというカラフルな枠にカラフルな玉を開発し、そろばんを作る(ワークショップ)という楽しみの世界を日本国内から海外に向けて展開し、「そろばんを制作する楽しみ・そのそろばんの使い方を指導、そしてそのそろばんの効果が何かを伝える」ような手法を取り入れ新たな播州そろばんの世界を展開。

起源・沿革

そろばんは、室町時代末期に中国から長崎へ伝来したといわれており、中棧の上二つ玉、下五つ玉の中国そろばんが改良されて現在の形となった。

わが国で日常生活に使われはじめたのは、文禄年間（1592～95）とみられている。当時の数学者毛利勘兵衛重能が京都二条京極で「天下一割算指南」という道場を開き、多くの人々に珠算を教授したのが全国に普及するきっかけとなった。

播州地方でのそろばん製造は、天正年間（1573～91）に豊臣秀吉が三木城を攻略した際に、大津方面にのがれた住民が大津そろばんの製造技術を習得し、帰郷して三木・小野周辺で製造を始めたことが起源とされている。

そろばん製造は小野市を中心として発展し、全国生産量の多くを占めるに至った。昭和35年頃がそろばん製造の全盛期であったが、1.電卓の普及、2.学校におけるそろばんの授業時間の減少、3.官公庁や一般企業のコンピューター導入、4.少子化による子どもの減少などにより需要は減少している。

しかし、そろばんは古来から持つ機能や、教育的効果が認められ小学校の算数の教科に取り入れられており、最近では脳を活性化させて集中力や創造力を養うということで、幼児教育や高齢者認知症予防の器具として見直されてきている。

「播州そろばん」は、昭和51年6月に通産大臣から伝統的工芸品の指定を受けた。小野市の地場産業として、小野市・小野商工会議所・小野市珠算振興会が中心となり振興事業を展開している。

問い合わせ先

播州算盤工芸品協同組合

住所：〒675-1372 小野市本町 600

電話：0794-62-2108

FAX：0794-62-2109

事業内容：

- ① 小野陣屋まつり・小野市産業フェスティバル出展
- ② そろばん組立体験教室の開催
- ③ 全国珠算教育連盟主催全国珠算選手権大会来賓参加
- ④ 海外でのイベント参加（ワークショップなど）
- ⑤ 全国くらしの工芸展出展
- ⑥ 原材料、副資材の共同購入
- ⑦ 見学会、研修会、講演会の開催
- ⑧ 後継者育成事業情報サービス

兵庫県木珠事業協同組合

住所：〒675-1363 小野市古川町 279

電話：0794-62-3565

事業活動：

- ① 副教材の共同購入
- ② 技術指導
- ③ 見学会、交流会の開催

播州算盤製造業組合（任意団体）

住所：〒675-1344 小野市下来住町 999-1

電話：0794-63-2029

事業内容：

- ① 副教材の共同購入

- ② 技術指導
- ③ 見学会、交流会の開催

木工芸品

起源・沿革

「木珠のれん」は、算盤の産地である小野市で、旧兵庫県小野工芸指導所が研究開発し、昭和 30 年頃からそろばん玉を応用して製品化したのが始まりである。

昭和 35 年頃から需要が急速に増大し、当初夏物商品として扱われたものが、生活様式の変化に伴い四季商品化した。

その後、昭和 45 年頃から木珠のれんより小家具木工(工芸品)の分野に進出し、小野のインテリア商品として人気を集めている

問い合わせ先

播州算盤工芸品協同組合

住所：〒675-1372 小野市本町 600

電話：0794-62-2108

FAX：0794-62-2109

兵庫県木珠事業協同組合

住所：〒675-1363 小野市古川町 279

電話：0794-62-3565

事業活動：

- ① デザイン開発と新製品の試作
- ② 若手後継者の育成
- ③ 展示会などへの出展と視察
- ④ 研修会・講習会の開催

杞柳製品

概要

(1) コリヤナギの自然木を使い、強靱でしなやかな風合い、柔らかさと粘りを活かしながら、手で一つ一つ編み上げる技法には、底編み 7 種類、縄編み 6 種類、縁編み 18 種類、蓋編み 10 種類があり、行李やおしゃれな手提かごが組み合わせにより様々な作品に仕上がる。

起源・沿革

杞柳細工の起源は豊岡市の中央を流れる円山川のほとりに自生していたコリヤナギを利用して奈良時代に始められた。柳行李は御物として伝えられており、現在も当時の但馬国産柳箱が奈良正倉院に保存されている。豊臣時代城下町を形成と共に産業としての歩みが始まり、江戸時代初期京極藩主が保護奨励し専売制度を確立し、全国に豊岡の柳行李として知られるようになった。

明治 14 年、バンドと取っ手を取り付けた手に持てる「こうりかばん」が作られ、手に提げる物の製

造が始まり、明治 42 年創案した大正バスケットの全盛時代を築き、数々の日用品が製造されて海外に輸出し大きく発展した。物を運ぶのに適した柳行李は戦争の度に軍用行李として大量生産され、戦後は買物籠、盛り籠、花籠、等様々な製品が生産された。

昭和 48 年、中国との国交回復以後は国際化の進展に伴い、次第に海外からの安価な製品の流入が増加し、豊岡杞柳製品の生産は減少の一途を辿った。

平成 4 年に国の伝統的工芸品の指定を受けて後継者の育成に努めた結果、現在では若い伝統工芸士がつくる草木染を施したおしゃれな手提げ籠が注目を集めるようになり、平成 15 年度のグッドデザインひょうご大賞を受賞するなど、取組の成果が実を結びつつある。平成 13 年には特許庁の地域団体商標に登録された。

なお、杞柳の語源は「孟子」の「人性ヲ似テ仁義ヲ為スハ、猶木杞柳ヲ以テ、杯倦ヲ為ルガゴトシ」(本来、自然なままの人生に、仁義の気質を持たせるのは、ちょうど杞柳＝コリヤナギで曲げ細工をつくるようなものである)により、コリヤナギの学名を持つ柳の漢字名である。

現在の取組

一時 15 名いた伝統工芸士は高齢化により、現在今年度に新規参入も合わせて 8 名となっている。絶えず新しいデザインを生み出し努力しているが、産地として維持していくためには必要な人材確保は欠かすことができないと、平成 2 年から続けてきた後継者育成事業を若年層等創出とし、初級コースと中級者コースで各 20 回開催して育成に努力している。

問い合わせ先

兵庫県杞柳製品協同組合

住所〒668-0801 豊岡市赤石 1362

電話：0796-23-3821

FAX：0796-24-0913

豊岡かばん

概要

- (1) 江戸時代より発展していた杞柳産業が基盤。
- (2) 「豊岡鞆」を地域ブランドとして申請し、平成 18 年 11 月 10 日付けで兵庫県の中では第一号の登録。
- (3) 東京での展示会開催、大都市の百貨店等でのフェア、雑誌広告など各種 PR 活動を行ない、アパレル業界、雑貨業界など、他業界から注目を集める。

起源・沿革

豊岡地方では、江戸時代より発展していた杞柳産業を基盤に、大正末期から昭和にかけてファイバーかばんが製造され始めた。柳行李の販売網に乗って急速に伸び、昭和 10 年頃には当地の主産業になった。

原材料不足で大戦中は停滞したものの、戦後の復興は早く、ミシン縫製の導入、オープンケースの考案、新素材としての合成皮革・ナイロン等の活用など、様々な改革を行った。また、産地は「メーカー」、「産地問屋」、「かばん材料商」、「下請」による構造となっている。

昭和 52 年に始まった円高によって昭和 53 年度の生産高は最低を記録した。

平成6年には「豊岡・世界のかばん博」開催を契機に、国際かばん都市の創造を目指して豊岡産地の情報発信に努めたが、平成7～8年頃からの円高の影響により輸入品との競争が激化し、国内向け出荷数量が減少した。それに対応するため、産地では集積活性化法に基づき、平成7年度（～11年度）から生産工程の合理化、IT化、新製品の開発などを推進した。

近年は、単にかばんの生産のみならず各種の容器など、あらゆる分野への取組や天然皮革素材の活用が進められ、平成15年には「豊岡グラフィティ」、「豊岡トラディショナル」を発表し、豊岡が築き上げてきた資産を活用し、豊岡が様々な技術とスタイルの蓄積された「厚みのある産地」であることをPRしている。最近では異業種との交流が積極化し、販路開拓・新製品開発などで成果をあげてきた。

平成16年には、台風第23号により産地内の多くの企業が被害を受けたが、同年より取り組んでいたJAPANブランド育成支援事業で、平成17年7月にIFFに出展して高い評価を得た。

商標法改正により平成18年4月1日より導入された地域団体商標制度に「豊岡鞆」を地域ブランドとして申請し、平成18年11月10日付けで兵庫県の中では第一号の登録となった。その後、東京での展示会開催、大都市の百貨店等でのフェア、雑誌広告など各種PR活動を行っている。その結果、アパレル業界や雑貨業界など、他業界から注目を集めている。

問い合わせ先

一般社団法人豊岡鞆協会

住所：〒668-0041 豊岡市大磯町 1-79

電話：0796-23-7833

FAX：0796-24-2697

URL：<http://www.bag.or.jp>（外部サイトへリンク）

事業活動：

- ① 上部団体との連絡を密にし、業界の発展・向上のために、陳情、具申、情報交換をはじめとする業界の総合的組織体としての活動

兵庫県鞆工業組合

住所：〒668-0041 豊岡市大磯町 1-79

電話：0796-23-7833

FAX：0796-24-2697

URL：<http://www.toyooka-kaban.jp>（外部サイトへリンク）

事業活動：

- ① 組合員の指導・教育事業、情報資料の収集・提供、経営の安定化の研究
- ② 地域ブランド「豊岡鞆」のPR、販路拡大事業

兵庫県鞆卸商業組合

住所：〒668-0041 豊岡市大磯町 1-79

電話：0796-23-7833

FAX：0796-24-2697

事業活動：

- ① 指導・教育、資料の収集・提供、安定事業、合理化の研究、共同販売に関する事業、運送に関する事業等

協同組合豊岡鞆工業センター

住所：〒668-0051 豊岡市九日市上町 817-12

電話：0796-22-7652

FAX：0796-22-7653

URL：<http://www2.nkansai.ne.jp/org/kaban/>（外部サイトへリンク）

事業活動：

① 「豊岡鞆団地」の宣伝・啓蒙活動、組合員・従業員への研修・講演会・情報交換・懇親等

故繊維加工

概要

（1）故繊維加工業は家庭で廃棄されるボロを原料にして加工生産することによって製造業界に資材を供給しており、リサイクル産業として社会に貢献。

起源・沿革

高砂周辺に集積する故繊維加工業界は、明治34年4月の三菱製紙(株)高砂工場の操業に伴い、廃棄されるボロを利用することから始まった。

明治・大正時代はボロは、主に製紙、火薬、毛織原料として使用されていた。昭和時代になって、経済の工業化の進展に伴い、機械拭布用(ウェス)としての用途が開拓された。

その後、製紙の原料がパルプに移行するにともない故繊維の販売先の中心は海外に向けられた。業界は輸出加工分野で隆盛をみたが、戦争により貿易の中断を余儀なくされた。

戦後、業界は貿易の復活とともに再び活況を取り戻し、外貨の不足していたわが国の外貨獲得産業として活躍した。同じ頃に設立された任意組合は、昭和33年に現在の組織に改組されて業界の柱として大きく貢献している。

問い合わせ先

兵庫県故繊維加工協同組合

住所：〒676-0033 高砂市高砂町材木町 1216

電話：079-442-1585

FAX：079-442-1588

事業活動：

- ① 販路開拓
- ② 共同販売
- ③ 原材料及び資材の共同仕入
- ④ 廃棄古布の処理問題

真珠核

概要

（1）明治40年にドイツ人が貝ボタンの製造法をわが国に伝え、明治42～43年頃に洲本市内で製造が始まったことが起源。

起源・沿革

真珠核は養殖真珠の芯となるもので、養殖真珠の「原料」である。この核をアコヤ貝に植え付けて海中に沈めておくと真珠層が巻きついて、真珠が誕生する。

真珠核の主な原材料は、米国・ミシシッピ川のアコヤ貝やミツヤマ貝である。これを神戸の商社が輸入するため、真珠核製造業者は陸上・海上輸送とも淡路島島内では最も利便の良い洲本市に集中している。

真珠核製造業者は、貝ボタン製造業者からの転業者が多い。明治40年、ドイツ人が貝ボタンの製造法をわが国に伝え、明治42～43年頃に洲本市内で製造が始まった。原料、製品の輸入基地神戸港に近接しているため、家内労働力を活用した産業として栄え、軍服用ボタンとして需要が伸びた。第二次大戦中は産地全体で淡路製鈕を設立し、業界を一本化した。戦後、統制解除となったが主原料のドブ貝の輸入が中止になったため、南方産の海水貝に原料転換した。

昭和25年、真珠核もボタンと同様に貝を加工する製品であることから、洲本市の1業者が淡水貝を使い真珠核製造を手掛けた。昭和30年代は合成樹脂系の化学ボタンが登場したことに伴い、化学ボタンへの転業が相次いだ。これとほぼ同時に大阪府下の技能者を迎えて本格的な真珠核の製造が始まった。昭和35年から40年頃にかけて世界的な真珠ブームがおこり、化学ボタンに押された貝ボタン業者が一斉に真珠核製造に転業した。最盛期の昭和40年代前半には、業者数は130に達した。

好況は長くは続かず、昭和40年代後半には、1.生産過剰、2.海洋汚染、3.真珠ブームの沈静化等のマイナス要因が重なり、業況は悪化した。その後、昭和50年頃には再び活気を取り戻し、需要と供給のバランスが回復した。

昭和55年に11業者によって、淡路真珠製核協同組合が設立された。この組織化により相互扶助の気風が生まれ、目まぐるしく変化する社会に組織力で対応できる基盤が確立された。

しかしながら近年は世界的に宝飾品需要は冷え込んだ状態が続いており、真珠核生産高も減少傾向となっている。

問い合わせ先

淡路真珠製核協同組合

住所：〒656-0054 洲本市宇原 1887-6

電話：0799-22-2598

FAX：0799-24-3512

淡路真珠核生産組合

住所：〒656-0051 洲本市物部 3-2-79

電話：0799-22-0443

FAX：0799-22-366

事業活動：

- ① 真珠核販売面についての協議
- ② 原材料輸入についての協議
- ③ 親睦活動等

真珠加工

概要

(1) 日本の加工技術の水準は非常に高く「日本品質」として海外市場においては別格の認識。

(2) 日本の真珠輸出のうち約 8 割が神戸から行なわれている。

起源・沿革

天然真珠は昔からペルシャ湾、インド、オーストラリア沿岸、セイロンなどで真珠貝から産出され、その希少価値と高貴な光沢によって、世界中の人々に珍重され愛されてきた。日本においても、日本書紀・古事記・万葉集ですでに記述が見られ、また東大寺三月堂の観音像や正倉院の御物に真珠を使用したものがある。

真珠養殖も古くから試みられてきたが、量産は難しかった。その産業化の始まりは、明治 26 年に御木本幸吉が作った半円真珠である。その後多くの人々により研究が続けられ、御木本幸吉、西川藤吉、見瀬辰兵その他の協力者の努力により明治 40 年に「真円真珠施術技術」が発明され、一連の特許が出願された。大正 13 年にはパリ真珠裁判でアコヤ養殖真珠は本物の真珠であることが認められ、昭和 3 年には特許の公開を契機に全国各地に真珠養殖事業が広まった。施術作業がきわめて微妙なものであるため、アコヤ真珠養殖は日本独特の産業として発展した。

神戸と真珠の関わりは、神戸港開港後の明治中期頃からと言われており、昭和 3 年の真円真珠特許公開後には真珠の集散地として活況を呈するようになった。

神戸において真珠加工業が発展したのは、1.三重、愛媛、長崎、熊本などのアコヤ真珠生産地に近く立地条件に恵まれていたこと。2.貿易都市として天然真珠の時代から長く輸出貿易を促進していたこと、3.大正時代に神戸の北野町周辺に加工技術を開発した真珠業者が集まり、研磨や穴あけの加工技術が次々に開発されたこと、4.海と山に囲まれた神戸の自然環境による安定した採光条件が穴あけや連組み等の真珠加工工程に適していたこと的要因によるとみられる。

戦中・戦後の混乱期を経て、戦後間もなく海外への輸出が再開された真珠は政府間貿易という管理貿易体制のもとで、外貨獲得に重要な役割を果たした。また、進駐軍やその家族が持ち帰る土産物として人気を集め、さらに民間貿易が再開された昭和 24 年以降には、輸出はアメリカを中心に著しく伸長した。

この状況は、作れば売れることによる生産増大、品質低下をもたらし、昭和 40 年代には輸出不振による不況期に入った。これを克服して昭和 50 年代からは安定成長を続けてきた真珠業界であるが、バブル崩壊後は、アコヤ貝の異常斃死による浜揚げの激減、中国産の淡水真珠をはじめとする海外産真珠の生産量の増大、加工技術の一部流出と低コストを背景とする海外での加工品の大量生産などによる市場の混乱から、多くの問題に悩まされていた。一方、オーストラリアや仏領ポリネシア諸島で生産された南洋の白蝶・黒蝶真珠（原珠）が神戸の加工を求めて集積され、現在は南洋（白蝶・黒蝶）真珠が 6 割、アコヤ真珠が 3 割の輸出構成となっている。

しかし、依然として日本の加工技術の水準は非常に高く「日本品質」として海外市場に於いては別格の認識となっている。

平成 15 年度より従来は香港で開催されていた海外産真珠の入札会を神戸で原則として年 2 回程度「国際保税展示入札会」の形態で行うことで海外顧客の神戸来訪を促し国際的な取引の増進を図ることや、香港において開催されている大型の国際宝飾展への団体参加により輸出の促進を行ない、神戸は真珠の加工、取引の場として、また海水産真珠の集散地としての世界的地位を堅持している。財務省全国通関統計をみれば、昭和 50 年代以降は日本からの真珠輸出の約 8 割が神戸から行なわれていることが確認できる。平成 28 年以降は香港におけるジュエリーショー（会期 5 日間）での成約・成約見込額合計が約 70 億円を記録し続けている。

問い合わせ先

日本真珠輸出組合

住所：〒650-0031 神戸市中央区東町 122

電話：078-331-4031

FAX：078-331-4345

事業活動：

- ① 海外ジュエリーショーへの出展およびジャパンパールパビリオン運営
- ② 真珠の品質検定事業および指導
- ③ 海外市場における戦略的ブランディング
- ④ ホームページの運営 (<https://japan-pearl.com/> (外部サイトへリンク))
- ⑤ 輸出不適格真珠の集荷処分事業
- ⑥ 国際保税展示入札会の開催
- ⑦ DVD、ブルーレイディスク等真珠紹介動画媒体の販売、配布による広報活動
- ⑧ KOBE PEARL SOUQ 及びパールミュージアムの運営による真珠関連製品などの展示及び紹介

PCK 協議会・神戸真珠親睦会

住所：〒650-0031 神戸市中央区東町 122 真珠会館 2 階

電話：078-332-8050

FAX：078-332-8055

KOBE PEARL SOUQ (NEO PEARL KOBE)

住所：〒650-0031 神戸市中央区東町 122 日本真珠会館内

電話：078-333-0905

FAX：078-333-0906

参考URL

兵庫の地場産業（概説）	http://kdskenkyu.saloon.jp/jibasan.htm
同上（食料品）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs01foo.pdf
同上（繊維）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs02tex.pdf
同上（化学・雑貨）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs03che.pdf
同上（窯業・土石）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs04pot.pdf
同上（機械・金属）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs05mac.pdf
兵庫の伝統的工芸品（概説）	http://kdskenkyu.saloon.jp/tracrafts.htm
